

目 次

1 提案趣旨	1
(1) 今日的な課題から	
(2) 学校教育目標との関連から	
(3) 本校の実態から	
2 研究主題のとらえ方	2
(1) 「道徳科」の位置付け	
(2) 基本的な考え方	
(3) 目指す児童像	
3 研究の方法	4
(1) 研究組織	
(2) 研究内容	
(3) 教育課程上の工夫	
(4) 研究授業の進め方	
4 成 果	10
5 課 題	10

共によりよく生きようとする児童を育てる道徳教育 ～主体的に話し合い、互いに深め合う道徳教育の工夫～

市貝町立小貝小学校教諭 松尾 昌子

1 提案趣旨

(1) 今日的な課題から

子どもを取り巻く環境は大きく変化している。少子化、核家族化など、子どもたちの生活の基盤となる家庭生活そのものも一昔前とはかなり異なってきている。地域とのつながりが次第に薄れてきているだけでなく、情報の氾濫や情報機器への依存による人間関係の希薄化も指摘され、周囲との良好な対人関係を築くことが苦手な子どもが増えてきている。

このような現代社会の中で、いかに子どもたちが健全に育ち、よりよい生き方を見いだすことができるのか。私たち教職員は誰もが、子どもたちの健やかな成長を願っている。様々な問題を抱える子どもたちが増えてきている状況の中、その責任の所在を追究するだけではなく、目の前にいる未来ある子どもたちにとって、最善の教育をしたい。そして、学校教育の中でできることは何かを問い合わせ続ける日々である。

近年、子どもたちの豊かな人格を形成していくための道徳教育への期待が一層高まり、平成30年度より、「道徳科」として教育課程上にも位置付けられた。しかしながら、教員の中でも、その指導に不安が大きいという声もある。そこで本校では、先に述べた今日的課題解決のために、道徳教育を教育活動の要とし、子どもたちの心を育てたいと考えた。「道徳科」についての研修の充実を図るとともに、学校教育全体における道徳教育について研究することにより、共によりよく生きようとする児童の育成を図りたい。

(2) 学校教育目標との関連から

本校の学校教育目標は、「よりやさしく よりかしこく よりたくましく 生きる子」である。この教育目標を受け、「みんな仲良く、学力アップ、体力アップ、心もアップ」というスローガンを掲げ、全職員で一丸となって教育目標の達成のために、日々教育活動に取り組んでいる。

学校生活の基盤となる学級が、一人一人にとって居心地がよく、本音を言い合える集団であることは大変重要なことである。そこで、本研究においては「道徳科」において、児童にとって魅力ある課題を提示し、児童が多様な視点から話し合い、語り合うことを通じて、自己のよりよい生き方を考えていく授業を目指していくこととする。さらに、自分の考えを明確にもち、それを他の考え方と比べ練り合いながら確固たるものにしたり、あるいは変化させたりすることで考え方を深めていく活動を重視していく。これらのこととは、本校学校教育目標「よりやさしく よりかしこく よりたくましく 生きる子」の達成に迫るものであると考える。

(3) 本校の実態から

本校の児童は、明朗で素直である。授業では、話をよく聞き、真面目に取り組む児童が多い。また、当番活動などでは、与えられた役割を果たそうと努力する姿が見られる。その反面、自分で判断し行動できる児童は少なく、指示待ちの児童が多いことも事実である。周囲の友達に同調することを重んじる傾向にあり、自由に自分の意見や考えを発言することを苦手とする児童も多い。

平成29年5月に行った道徳性に関するアンケートで、道徳科の内容項目それについて調査したところ、児童の自己評価はおおむね保護者や教師よりも高い結果であった。その中で、比較的低い項目が「個性の伸長」であった。これは、自己表現力の乏しさや自信のなさにつながるものと推察される。また保護者を対象としたアンケートで「育てたい道徳性」について聞いたところ、「希望と勇気、努力と強い意志」、「友情、信頼」の項目への回答が特に多かった。教職員からは、「希望と勇気、努力と強い意志」、「個性の伸長」、「親切、思いやり」が挙げられた。

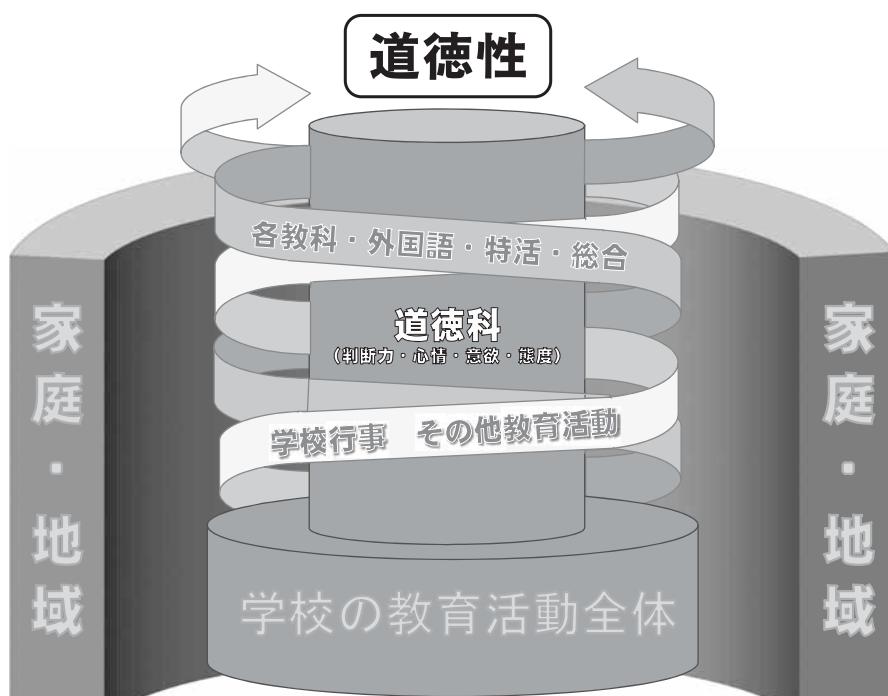
このような児童の実態から、本校児童のよい面を伸ばしながら、自分の思いを主体的に話し合う楽しさを実感させられるような道徳教育の工夫に取り組んでいきたい。その実現により、共によりよく生きようとする児童が育つものと考える。

以上の理由から、本研究主題を設定した。

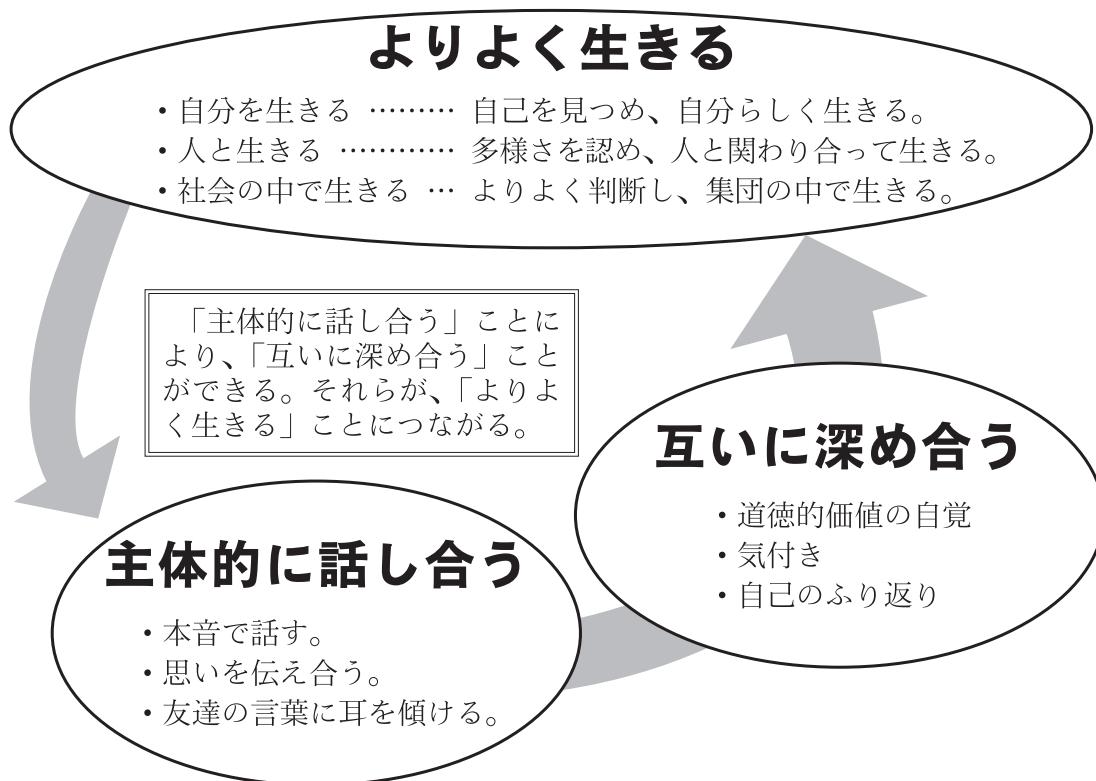
2 研究主題のとらえ方

(1) 「道徳科」の位置付け

「道徳科」を道徳教育の要とし中心に位置付ける。道徳科において、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度を養っていく。「道徳科」を取り巻くように、各教科や外国語活動、特別活動、総合的な学習の時間があり、さらにそれらを包括するように家庭や地域がある。イメージ図は下記の通りである。



(2) 基本的な考え方



(3) 目指す児童像

本研究主題を受け、また、「主題設定の理由」で述べた児童の実態や保護者、教師の願いをもとに、目指す児童像を次のように設定した。さらに、児童の発達の段階を踏まえ、学年ブロックごとに設定した。

■ 目指す児童像

自己を見つめ、思いを伝えながら考えを深め、
共によりよく生きようとする児童

低学年	中学年	高学年
○自分の考えを進んで発言できる児童	○自分を振り返り、本音で思いを伝えられる児童	○自己を見つめ、自分の思いを豊かに表現できる児童
○友達の意見をしっかり聞き自分の考えと比べながらそれぞれのよさに気付く児童	○話し合い活動の中で多様な考えに気付き、自分の考えを広げられる児童	○自他のよさに気付き、多面的多角的に考えを深められる児童
○友達や周囲の人々とのふれあいを通して、人と関わる喜びを感じられる児童	○相手の気持ちを考えて行動し、共に生きる喜びを味わえる児童	○人と関わりながら、よりよい生き方を追究できる児童

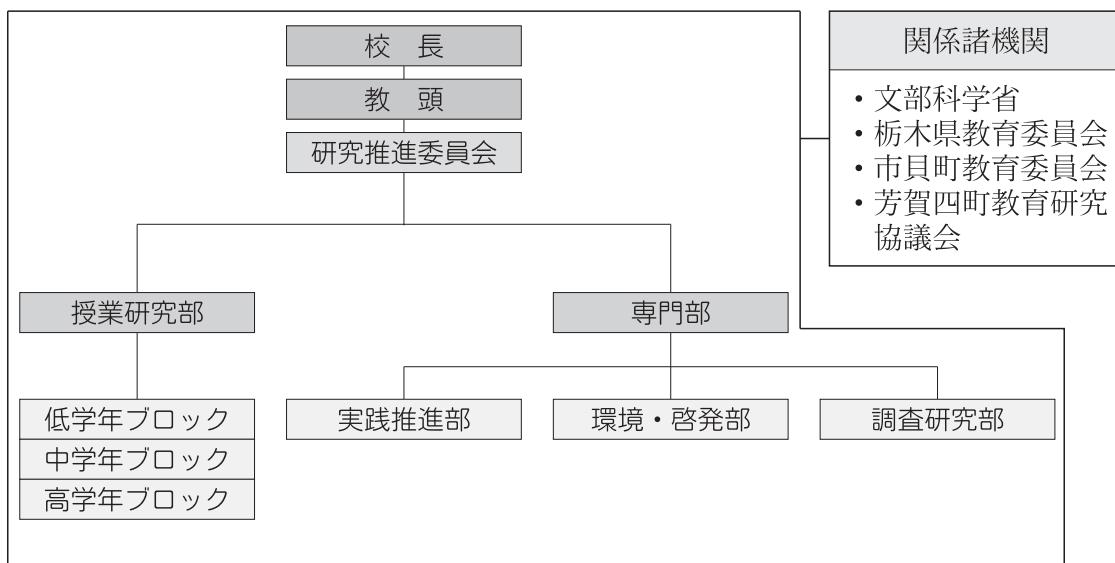
3 研究の方法

(1) 研究組織

「研究推進委員会」には各部長が所属し、校長、教頭からの指導や、各部の取組方法についての相談などが効率的に伝わるようにした。

「研究推進委員会」の下に「授業研究部」と「専門部」を設定した。

組織図（H30年度）



★研究主任 ◎：部会主任・ブロック主任

研究推進委員会	◎軽部	★松尾	梁木	小野口	北原	池尻
---------	-----	-----	----	-----	----	----

実践推進部	◎小野口	鯉沼	軽部	鈴木
環境・啓発部	◎梁木	添谷	岩間	原田
調査研究部	◎北原	高久		

低学年ブロック	◎梁木	松尾	岩間		
中学年ブロック	◎鯉沼	添谷	鈴木		
高学年ブロック	◎小野口	北原	原田	軽部	高久

(2) 研究内容

① 研究推進への取組 【研究推進委員会】

ア 研究計画立案、実施に向けた中心的な取組

(ア) 研修計画の作成と実施

(イ) 道徳教育につながる教育活動の計画

(ウ) 研究紀要の作成

② 授業改善への取組 【授業研究部】

ア 年間指導計画の見直しと活用

イ 道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度を育むための指導の工夫

ウ 授業研究の工夫

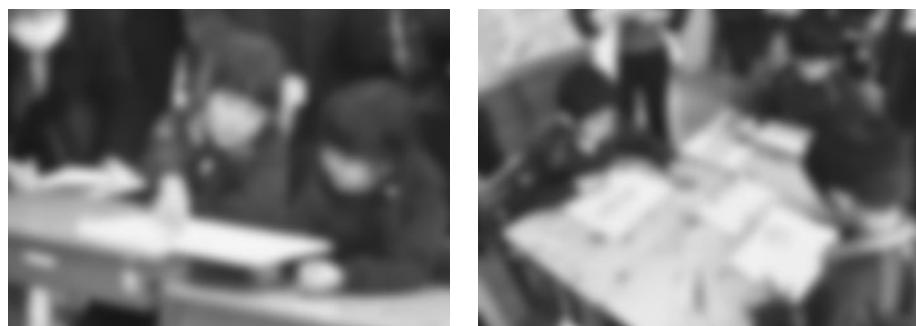
(ア) 研究主題に迫るための工夫

◇課題設定の工夫

- ① 児童の実態を踏まえ、本時の価値に迫るための学習課題を設定することで、共に考え方を交わす雰囲気づくりをしたい。
- ② 視覚的に資料を提示（ＩＣＴの活用、写真、図など）することで、より切実感をもって学習に向かおうとする意欲を高めたい。

◇自ら考え、学び合うための話し合い活動の工夫

- ① グループ（3～4人）やペアでの活動を取り入れることで、多様な考え方につれてながら話し合い、自己の思考がより深まるようにしたい。
- ② ホワイトボードや心情ツールなどを用い他者の考え方を視覚的に捉えることで、自分と他者の考え方の類似点や相違点に気付かせたい。



- ③ 問い返しの発問をすることで、児童の心を揺さぶり、多様な考え方があることに気付かせたい。
- ④ 児童の発言で足りない部分を互いに補い合わせることで、児童が主体的に話せる環境をつくりたい。

◇資料から離れ、自分自身の問題として捉え直すためのふり返りの工夫

- ① 児童の考え方を類型化したり、キーワードを板書したりすることで、本時の学習を確認し、ふり返りに生かしたい。
- ② 自分や友達の考え方を自由にメモすることで、本時における自身の心の動きに気付けるようにしたい。
- ③ 過去の自分、現在の自分、未来の自分など、自分自身の言葉で自身について考えさせ、自分の言葉で表現させたい。

◇多様な学習指導の工夫

- ① 道徳科の授業を体験活動と関連させて、より心に響く道徳の授業を目指したい。
- ② 授業の中で、多様な人材を活用することで、魅力ある道徳の授業を目指したい。
- ③ ティームティーチングによる授業を行うことで、T2の参加による授業の活性化や、より細やかな支援や見取りにつなげたい。



地域の鯉のぼり屋さんを招いて（1年生）



T2とゲストティーチャーによる説話（6年生）

(イ) 思考を深めるための話し合い活動の工夫

◇多様な学習形態の工夫

- ① 発達段階を考慮し、低学年ではペア学習を、中学年以上ではグループ活動を取り入れることで、互いの考えを聞き、多様な考えに触れさせたい。
- ② 座席をコの字型や半円形にするなど、互いの表情がよく見えるようにすることで、より相手を意識して話したり聞いたりさせたい。



コの字型の座席

③ 小規模校の特質を生かした道徳教育への取組

【実践推進部】

- ア 道徳教育と他教科を関連させた活動の充実
- (ア) 各教科における体験活動
 - (イ) 総合的な学習における異学年交流活動
- イ 教育活動全般における道徳教育の充実
- (ア) 集会活動（会の終わりの感想発表「小貝っ子タイム」）
 - (イ) 縦割り班活動
 - (ウ) 帰りの会での互いのよさの伝え合い
 - (エ) 授業後の感想発表
- ウ 児童指導と関連させた道徳教育の充実
- (ア) 小貝っ子スタンダードの設定（児童指導）
 - (イ) あいさつ運動
- エ 地域との関連を図った活動
- (ア) ふるさと学習の充実
 - ① 探鳥会
 - ② 福祉交流活動
 - ③ 感謝の会
 - ④ 読み聞かせ
 - ⑤ 各学年の学習



縦割り班活動の様子



小貝っ子スタンダード紹介の様子

【環境・啓発部】

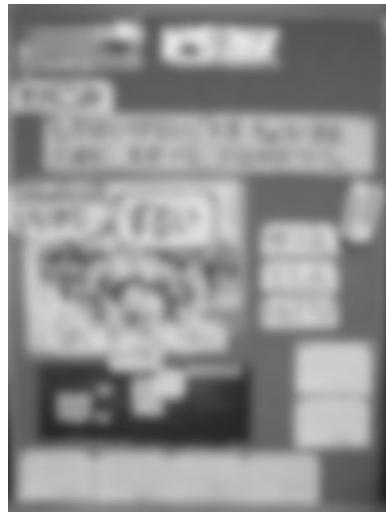
ア 道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度を育む環境づくり

(ア) 道徳関係掲示コーナーの設置、整備

- ① こかいの木
- ② どうとくのへや
- ③ 各学級の道徳コーナー
- ④ 各学級の道徳の木



「どうとくのへや」の掲示



各学級の「道徳コーナー」



各学級の「道徳の木」

(イ) 児童主体の掲示コーナーの設置、整備

- ① お誕生日コーナー
- ② 各委員会活動コーナー

(ウ) 資料の保管、管理

イ 家庭との連携や保護者への啓発

(ア) 「道徳だより」の発行

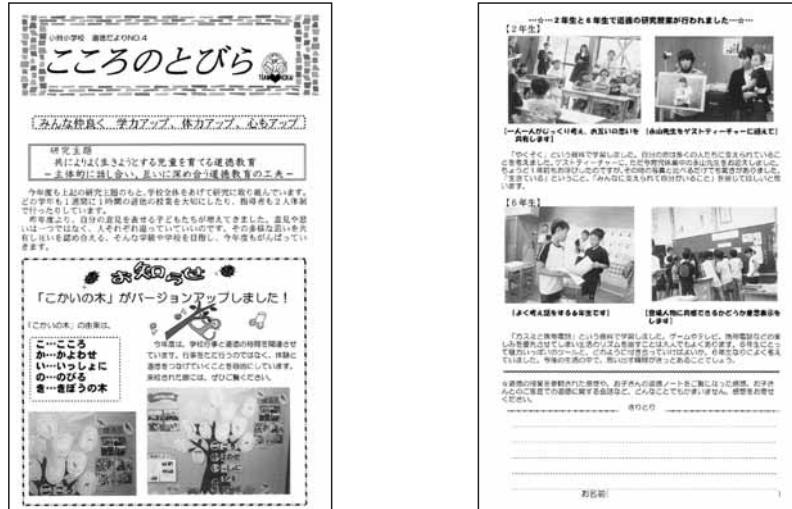
(イ) 保護者による道徳の授業参観

(ウ) 授業で活用した同一資料での親子の話合い

(エ) 学校だよりやホームページでの紹介



道徳資料室



道徳だより

【調査研究部】

ア 実態を把握するための調査、分析

- | | | |
|--------------------|-----------|-----------|
| ① H29. 5月 | ② H30. 2月 | ③ H30. 7月 |
| (ア) 児童の意識調査の実施と分析 | | |
| (イ) 保護者の意識調査の実施と分析 | | |

(3) 教育課程上の工夫

本校では、水曜日を特別日課（以下、水曜日課）とし、放課後を道徳研修にあてられるように下校時刻を早めている。また、全学級が水曜日に道徳科の授業を行っている。さらに、道徳科ではチームティーチングの体制をとることができるように、調整を図った。○印は、各学年の担任が自分の学級で授業を行うことを、学習指導助手等の学年表記は、その学年でT2として授業に参加することを示す。・印は、空き時間を示す。

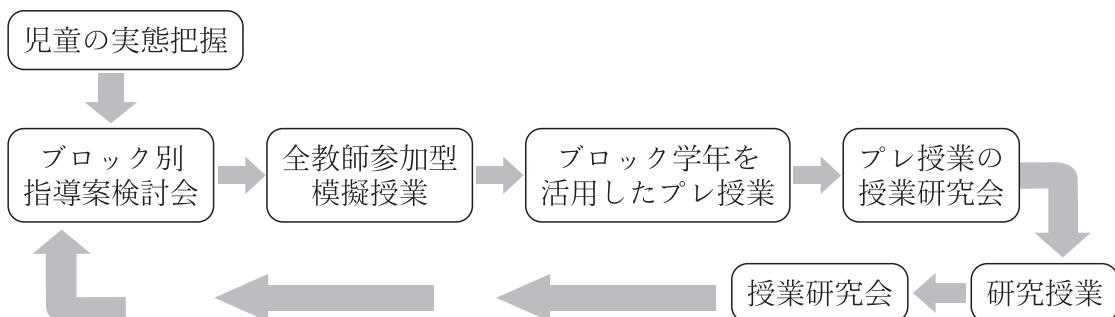
【水曜日の日課】

		1年	2年	3年	4年	5年	6年	1担	2担	3担	4担	5担	6担	教頭	教務	助①	助②	助③	学相
水	1	生活	国語	☆算数	国語	国語	算数	○	○	○	○	○	○			3年	5年	6年	6年
	2	☆道徳	国語	☆道徳	算数	音・社	国語	○	○	○	○	•	○	○	5音・	3年	5年	•	1年
	3	国語	☆道徳	体育	☆道徳	算数	☆道徳	○	○	○	○	○	○			2年	5年	6年	4年
	4	☆国語	☆算数	音楽	体育	☆道徳	書写	○	○	4体	•	○	○		3音	1年	•	5年	5年
	5	学活	生活	☆国語	社・音	体育	理科	○	○	○	○	○	○	○		•	5年	3年	

(☆… T.T体制) (1担… 1年担任 助①… 学指導助手① 学相…学校相談員)

(4) 研究授業の進め方

研究授業を行うにあたっては、児童の実態把握、指導案検討会、全職員参加型模擬授業、学年ブロックによるプレ授業、プレ授業の授業研究会、研究授業、授業研究会を一連の流れとした。必要に応じて、さらに模擬授業や指導案検討会を入れながら研修を重ねた。



模擬授業では、教職員が児童役になって授業を行うことで、児童の反応をある程度予想することができた。教師の発問が児童にとって分かりやすいかどうか、中心発問がねらいとする価値に迫ることができるかどうかを検討することもできた。本校は、若手教員が多いので、研究授業を含め、同じ資料で3回授業を行えることは、教材を多面的に捉え先輩教員からのアドバイスや気付きを促す学びの場としての役割も担っていた。

本校は単学級のため、プレ授業は低、中、高学年ブロックを中心に行い、全教職員が参観した。同じ授業であっても、発達の段階の違いから生じる違いがあり、指導者にとっても、その都度大きな発見があった。

毎回、このような形で研究授業を進め、指導法を検討し改善を図った。個々の研究授業をもとに、2年間、P D C Aサイクルを回しながら、授業者が明確な指導観をもち、ねらいとする価値がぶれないように指導ができたか、児童が互いに考えを深め合うことができたかを検証した。

研究授業の際は、全教職員が参観できるように「見守りボランティア」制度を導入した。これは、保護者に協力を呼びかけ、研究授業対象外の学級の自習の見守りを依頼するという制度である。毎回、協力する保護者が増え、児童もその交流を楽しみにしている。教職員も全校体制で研修に臨むことができた。



水曜日放課後の授業研究会



見守りボランティア

4 成 果

- 児童の道徳の授業に対する意識の向上が見られた。教師の授業力向上や環境の整備、道徳教育全般における諸活動のつながりなど、全校体制で組織的に研究を推進した結果であるといえる。また、地域人材の活用も授業に彩りを加え、小貝地区ならではの特色を生かすことにより、道徳の授業と日常生活が結びつき、より深い価値の自覚へと結びついた。
- 発達段階に応じて、ペアでの話し合い、グループでの話し合い、全体での話し合いと、形態を工夫しながら話し合い活動に取り組んできた。学校教育活動全体でも話す機会を多く設定することで、児童が各方面で、活発に自己表現できるようになってきた。また、聞く活動も重視し、友達の話をじっくりと聞くことで、多様な考えがあることに気付き、物事を多面的・多角的に捉えられるようになってきた。
- 評価については、大学の先生から専門的なお話を伺い、研修を重ねてきた。児童の学習の見取り方の研修や、T 2 による複数視点での見取りの導入、道徳ファイルを活用したポートフォリオ評価等、研究前よりも細やかな評価ができるようになり、児童の成長に気付く機会が増えた。また、指導案にも評価を位置付け、教師の意識づけが図られた。
- 教師は、きめ細やかな授業研究のP D C A サイクルを循環させる中で、ねらいに迫るよりよい指導方法の研究が進み、道徳的価値の自覚を深めるための授業展開を工夫することができた。小規模校のよさを生かし、全職員が足並みをそろえて研究に向かうことにより、普段の授業の質の改善も図られ、一人一人の授業力が向上した。
- 学校から発信される道徳教育の取組を通じて、新しくスタートした道徳科に対し、学校、家庭、地域が情報を共有し、理解を深めることができた。また、道徳科の授業やその他の教育活動への参加や協力により、家庭や地域社会全体で児童の豊かな心を育むことの重要性が意識づけられた。

5 課 題

- 児童の道徳性を養うため、発問や板書の仕方等を吟味する中で、多様な指導方法やアプローチの仕方を学ぶことができた。しかし、自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深める授業となるためには、更なる教師の指導力の向上が必要である。児童が問題意識をもち、自然と話し合いたくなる「考え方、議論する道徳」への変容を目指し、今後も道徳の指導方法について研修を重ねていく必要がある。
- 評価については研修を重ねてきたが、一人一人の成長の様子を継続的に観察し、記録することは、まだ不十分である。さらに、個々の見取りを指導に生かすためには、記録の仕方や効果的な見取りについて、今後も研修を進めていきたい。
- 少子化社会を迎えるにあたり、児童数の減少は、本地域でも大きな課題である。地域のよさや豊かな自然を生かした道徳科を展開することで、地域のよさに気付き、地域を愛する心豊かな児童の育成が、本地域の活性化にもつながる様子が少しずつ見られるようになった。さらに、学校、家庭、地域が一丸となれるように連携を図る必要がある。道徳教育として学校側が捉えていることを周知できるよう、より積極的に、学校から発信していくことが必要である。